

司式: 千田由美子

奏楽: 橋本恵美子

前奏: 「ああ神よ、天より見そなわし」(J. パッヘルベル)

招詞: 希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。(ロマ5. 5)

讃美歌 20「主に向かってよこび歌おう」

交読詩編 19. 1-7

01【指揮者によって。賛歌。ダビデの詩。】

02 天は神の栄光を物語り/大空は御手の業を示す。

03 昼は昼に語り伝え/夜は夜に知識を送る。

04 話すことも、語ることもなく/声は聞こえなくても

05 その響きは全地に/その言葉は世界の果てに向かう。そこに、神は太陽の幕屋を設けられた。

06 太陽は、花婿が天蓋から出るように/勇士が喜び勇んで道进行るように

07 天の果てを出で立ち/天の果てを目指して行く。その熱から隠れうるものはない。

朗読聖書①詩編 51. 12-14

12 神よ、わたしの内に清い心を創造し/新しく確かな霊を授けてください。

13 御前からわたしを退けず/あなたの聖なる霊を取り上げないでください。

14 御救いの喜びを再びわたしに味わわせ/自由の霊によって支えてください。

朗読聖書②エフェソの信徒への手紙 2: 14-22

◆キリストにおいて一つとなる(後半)

14 実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、

15 規則と戒律づくめの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、

16 十字架を通して、両者をつなぐ一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。

17 キリストはおいでになり、遠く離れているあなたがたにも、また、近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせられました。

18 それで、このキリストによってわたしたち両方の者が一つの霊に結ばれて、御父に近づくことができるのです。

19 従って、あなたがたはもはや、外国人でも寄留者でもなく、聖なる民に属する者、神の家族であり、

20 使徒や預言者という土台の上に建てられています。そのかなめ石はキリスト・イエス御自身であり、

21 キリストにおいて、この建物全体は組み合わされて成長し、主における聖なる神殿となります。

22 キリストにおいて、あなたがたも共に建てられ、霊の働きによって神の住まいとなるのです。

主イエス・キリストの父なる神さま、聖名を崇め賛美致します。今日も、私たちに新しい朝をお与えくださり、この教会で、またオンライン配信で、兄弟姉妹と共に礼拝を、お献げるために御前に集めていただきましたことを感謝致します。

今日から、『降誕前主日』を数える季節に入りました。神さまは、私たちに、愛に生き、全ての人が互いに愛し合うことの大切さを教えるために、イエス・キリストをこの世にお遣わしになりました。私たちを、その計り知れない愛に心から感謝する者となることができますようにお支えください。

今日は、主題を「開かれた教会、愛の連帯性をもって」として、信濃町教会第95回修養会2日目もたれます。私たちの教会が、何より神さまの愛に促され、主イエスに従うものとして101年目の歩みを進んでいくことができますように切に祈ります。

神さま、平和から程遠いこの世界を思います。特に、聖書で馴染み深い土地パレスチナ、そこで生きる沢山の人の命が、長い間、紙屑のように扱われています。私たちが遠くから眺めるだけの者ではなく、そこに生きる友を思い、自らの事として学び、平和を作り出すことに連なる者とさせていただきますと祈ります。また、神さま、3.11、東日本大震災と原発事故から14年と半年が過ぎ、今の私たちは何事もなかったかのように日常を送りつつあります。しかし、私たちは当たり前のように物質的な豊かさや便利さを享受してきた者であることを自覚しつつ、事故当時から被災地の方々と繋がる者として、信仰者として、放射能による健康被害の苦しみや不安の中にいる人々を忘れず、平和と命について、考え続けることができますように。

主よ、今日御言葉を取り次いでくださる笠原牧師を支え強めてください。語られる御言葉が私たちの心に深く届き、刻まれますように、豊に聖霊を注いでください。

この礼拝に様々な事情で集い得ない方々、また、教会から離れておられる方々もおります。特に苦しみや悲しみ、孤独の中におられる方々を覚え、主によって癒されますように、と祈ります。

神さま、今日、日本中、世界中の教会で献げられている礼拝を祝福してください。

この祈りを主イエス・キリストの聖名によって御前にお献げ致します。アーメン。

讃美歌 424「美しい大地は」

講壇「『新しい人』の方へ」 笠原義久

今日の「『新しい人』の方へ」という説教題は、ノーベル賞作家で2年半前に天に召された大江健三郎氏のエッセイ集から取ったものです。このエッセイ集は当初、大江さんの想像上の教室にいる小学校高学年くらいの生徒たちを読み手に想定し、一章ずつ書いていった物でした。しか

し子供たちの実際に則した成長のフィルムを早回しするように、子供たちはどんどん歳を加え、大江さんは高校生か大学初年位の若者を相手に書いている、そういう気持ちになっていったということでもあります。

「新しい人」という言葉はエッセイ集の最初の章に初めて出てくる言葉でありますけれど、このエッセイ集の最初から、謂わば通奏低音のようにして流れていた主題であると、そのように言ってよいかと思います。大江さんは、

“自分はキリスト教徒ではなく、聖書についての知識も浅いけれども、しかし十字架上で死なれた、そして新しい人となられたイエス・キリストの甦られたということ、つまり再び生きられて、弟子たちに教えを広めるよう、そのように励まされたということ、そのことを人間の歴史で何より大切なことだと、そのように思っています。”

と、そのように自分の思いを吐露します。

さて、この「新しい人」という言葉は、新約聖書では使徒パウロが書いたとされている『エフェソの信徒への手紙』(2:15, 4:24)と『コロサイの信徒への手紙』(3:10)の中、3カ所だけにしか出て来ません。先ほど朗読して頂いた箇所はその中の一つであります。

この『エフェソの信徒への手紙』の箇所では扱われている問題は、キリスト教会最初期の時代に、地中海周辺の各地の教会で問題とされていた或る一つの特異な事柄を巡ってであります。それはユダヤ人であるキリストの信徒と、ユダヤ人ではない、つまり異邦人であるキリストの信徒との対立、宗教的な慣習や出身の違いからくる対立の問題であります。ユダヤ人であるキリスト者、それから異邦人であるキリスト者、彼らが一つの教会の中で平和的に共存することは果してできるのか、そしてもしできるとするならば、それはどのような質の一致なのか、そういう問題であります。

扱っているテーマは歴史的に限定された特殊な問題でありますけれども、実は単なる当時の教会内部の一致ということを超えて、普遍的な解決の方向性、言わば広い社会領域における平和的な共存という問題に対する手掛かりを与えてくれている、そのように思われます。

さて、ユダヤ人であるキリスト者と、そうではない異邦人であるキリスト者との対立、冒頭の11節、今日の箇所の少し前、(小見出し)『キリストにおいて一つになる』のところで、パウロは、“この対立は、肉による対立であって、決して本質的な対立と見るべきでない”と言っています。“割礼が有るか無いか”ということ、「割礼」とはご承知のように、“神がイスラエルの民と結んだ契約の徴”、つまり「割礼」を受けていれば神の救いを約束された民であるということが一目瞭然明らかという徴のこと、それが「割礼」でありますけれども、そのようにして元々神によって定められた「割礼」も、今や形式的なもの、儀式的なものになってしまっている。「いわゆる人の手による」、人の手で拵こしらえたものと化してしまっている、そのようにパウロはここで言っています。些細なことのようでもありますけれども、私たちの日常の経験の中で、このような「いわゆる」、「いわゆる人の手による」、「いわゆる」という観点からする外面的な違いというものが大きな現実的な

意味を持っているということ、そのことに気付かされます。宗教上の儀式が違っているということ、もって生まれた習慣や慣習が違っていること、そしてそれによって生きて行く上で重要となる伝統が違っていること、そのような外面的な違いというものがお互いの不信や誤解を生む原因となっている。これに人種の違いというものが加わると、お互いの相互理解というものは本当に不可能に近いと実感されるほど困難なものになってしまう、それが私たちが経験しているところでもあります。

このような異邦人とユダヤ人との違いを問題にする際、『エフェソの信徒への手紙』では14節に見るように「隔ての壁」という言葉が使われています。かつての東西冷戦時代の象徴とも言うべき「ベルリンの壁」のように、ユダヤ人と異邦人との間に畝々と聳え立つ「隔ての壁」のことであります。壁のこちら側にはユダヤ人が、そしてあちら側には異邦人がいる。こちら側のユダヤ人は神の民としていろいろな特権を与えられている。とりわけ神の契約の民として、契約の証拠としての『旧約聖書』を与えられ、また契約に属する者としての徴、まあバッヂのような物でありましょうけれども、そういう徴として「割礼」を受け、そして確かな勝利(救い)への希望が与えられている、これがユダヤ人。他方、壁のあちら側にいる異邦人、この異邦人がどうかと言えば、“イスラエルの国籍もなく、約束されたいろいろな特権ない、この世での希望もなく、挙句の果ては神を知らずに生きていた”、そのようにパウロは記しています。そうであればこそ、そこから遠く離れた者と近い者という、そういう対立、即ち神無き者と神に近くいる者という、そういう対立も出て参ります。一見、肉による違い、「いわゆる」という些細なことから実に深刻な対立が出てくるという、そういう事実には私たちは知らされます。

私たちの周りにも実に沢山の「壁」が立っています。しかもそこには甚だ重大な私たちの生死に係わるような「壁」が沢山あります。経済格差の問題、それに起因する構造的貧富の差の拡大、そのような富んだ民と貧しい民との対立、あるいは強い民と弱い民との対立というものが、今の世界を覆っている大きな対立であります。更に人種の対立、肌の色の対立、こうした人種的、経済的対立に加えて社会的な対立が重なり合っています。このようなあからさまな「壁」だけでなく、私たちの周りには言わば沈黙の「壁」が沢山聳え立っています。「壁」に仕切られて恰も牢獄にいるかのように、一人ひとりの人間が「壁」の中の囚人のようにして座っている孤立と孤独の姿、それを私たちは「壁」という言葉から想像します。

それではいったいこうした「壁」は何処から出て来たのでしょうか。私たちは独房の中の囚人のようには生きたくはない、「壁」を取り払ってもっとフランクに他者とかがわり、もっと人間らしい豊かな感動を共にしたい、そのように切に願っています。にも拘らず、どうしてそのような「壁」が出来たのでしょうか。

一言で言えば、それは私たちが抱える生、生きることへの不安がそのようにさせている、生きることへの不安が「壁」を作らせている。生きることへの不安に脅かされるが故に私たちは、何某かの保護なにかしを求めざるを得ない。だから自分の周りに「壁」を作り、その「壁」によって不安から身

を守りたい。一旦築かれた「壁」は次第々々厚くなり、そして高くなっていきます。そしてやがてはびくともしない要塞のようになってしまいます。けれども「壁」がより厚くより高くなるということは、実は私たちの不安がそれだけ深刻であり、それだけ私たちがお互い人間同士の交わりから互いに遮断し合い、深刻な断絶関係に陥っているということ、そのことを意味しているのではないのでしょうか。

今日のネット社会の急速な浸透は、個々人が自分の厚い「壁」の中から外に向かってフランクに発言し、何とか他者との関わりを持ちたいという、そのような私たちの願望に見事に応えるものだと、そういう見方も出来るかも知れません。

とりわけ SNS、これは日本で作られた造語ですが、social networking service (SNS)、社会的なつながりを提供するサービス。SNS はあらゆる職業、あらゆる立場の人が対等にコミュニケーションを取れる手段として、スマートフォンの急速な普及と共に、大きな社会的影響力を持つようになりました。SNS の中でも代表的な当初からあったツイッター (Twitter)、このツイッターの元になっているツイート (tweet) という言葉に端的に示されるように、そこでの発言は基本的には <sup>つぶや</sup> 呟きであり、モノログに終始してしまう危険が大きいということ、そのことを私たちはどれほど自覚しているのでしょうか。自分が発信する、そしてその発信に应答する他者との対話によって、自分の意見や考えというものが絶対ではなく、自分が変えられることもあり得るということを充分覚悟する、あるいは対話的な関係から新しい考えや意見、更には思想を形成していくという、そういう展望の無い闇雲の発信、相手を勝手に誹謗中傷し、そしてそのことだけで満足してしまうような、そういう発信は本当に控えるべきだと、社会的には悪い影響以外のものは何もないということ、そのことをきちっと自覚すべきだと、そのように思われます。

さて、次に問うべきは、先ほど申し上げたような不安というもの、何故にそういう不安が私たちの人生を脅かしているかということであり、【エフェソの信徒への手紙】はそのことを考える際の重要なヒントを与えてくれます。【エフェソの信徒への手紙】が「壁」と言うとき、「二重の壁」を思い描いているようです。一つは「ユダヤ人と異邦人との間にある壁、人間相互の間にある壁」です。しかしそこにはもう一つの壁があります。それは「神と人間を隔てる壁」です。19 節に「外国人・寄留者」という言葉があります。「寄留者」というのは自分の故国、故郷ではない所に一時的に滞在居住している人のことでもあります。つまり、「人間はこの世界にあっては寄留者」、言わば「よそ者」であり、「故郷を喪失した者」とあるというそういう考え方がここにはあります。人間は「壁」によって故郷を喪失した者になっている。「魂の故郷である神から分離され遠く隔てられている、シャットアウトされて生きている、命の根源である神から疎外されて生きている」、そういう自己疎外的な存在である、そのように語られているのです。「人間は本来そうあるべき存在とはなっていない、このような自己疎外的な存在であるが故に忍び寄る深い生の不安を自覚せざるを得ない。だから「壁」を設け、壕を掘って自分の不安

を守ろうとする。人間がそうであれば世界もまたそうでしかあり得ない。世界は、そして人間は、その源である神から疎外されて生きている。”これが【エフェソの信徒への手紙】の人間観であり、また世界観であると言ってよいのではないのでしょうか。このように“神と人間との間に疎外関係が生じていること、そのことが人間相互の疎外、隔て合いの原因である”とそのように言われているのです。

このような私たちの存在全てを通じて、またこの世界全てを貫いている深い分裂と亀裂というそういう状況に対して、今日の聖書の一つ前 13 節、「しかし・今や」とそのように語られています。そのような分裂と亀裂が生じている、その状況に対して、“ところが今や事態に急変が生じた”と言うのです。何によってであるか、「キリストの血によって」である。

以下ポイントだけ追っていききたいと思います。

16 節にキリストは「十字架によって敵意を滅ぼした」とあります。キリストは神と人間の疎外関係という条件の下に全身を曝し十字架に掛り給うた。“十字架に付いた”ということは“人間の神に対する敵意の最も極まった姿”です。“人間の罪の最も凝縮した姿”です。しかし“十字架に付いた”ということは同時に、“神が自分の子を十字架に付けた”、そして“それが正しく神の救いの意志の表明であった”ということです。つまり人間と神の両方の側からキリストを十字架に付ける必然性があつた、十字架にはこの二つの必然性が凝縮されているのです。

このように神と人間の敵意を滅ぼし、罪の存在、疎外されている者である人間に救いをもたらすのがキリストの十字架であるとすれば、それまでユダヤ人の間にだけに有効であつた戒めの律法は廃棄されなければならない。救いに与るための数々の規定は全く無用、無価値のものとなった。そうだとすれば、律法の有る・無し、また律法を最も端的に象徴する「割礼」の有無によってユダヤ人と異邦人とを分離していた「隔ての壁」も、キリストの十字架によって破壊されたことになるでしょう。【律法】というユダヤ人にとって謂わば絶対要求は十字架の前に、それは相対的な要求に過ぎないものとして打ち砕かれたのです。つまりそこで「壁」は突破されたのです。もっと一般的な言い方をすれば、キリストの十字架は人間がお互い相手に突き付けている絶対的な真理要求を打ち砕くものである、一切の人間の絶対要求は十字架の前では成り立ち得ない、私たちににとっては絶対的と思われるこの世の様々な習慣の違い、伝統の違い、人種の違い、人間を分かち限らない対立、けれどもそれらは決して聳え立つ「壁」となるような絶対性というものは持ち得ない。それらはいくまでも暫定的であり、そして相対的である。主キリストの十字架の前には、今や、十字架による一切のものものの相対化ということを通して初めて平和が可能になる。

「キリストによって私たち両方の者が一つ霊に結ばれて御父に近づくことができるのです。」

18 節にはそのようにあります。今や神の御許に至る新しい道が開かれた。それはイエス・キリストという道なのだというのです。

イエス・キリストは旧約の預言者イザヤによって「平和の君(9:5)」と呼ばれる、そのように預言されました。そして実際イエス・キリストは二

人の人々であった異邦人とイスラエルの民という区別を廃棄して、新しくお互いに対して、また神に対して平和な「ひとりの新しい人」を造ったのです。パウロは『ガラテヤの信徒への手紙』の中で次のように言っています。

そこではもはや、ユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなた方は皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです(3:28)。

つまり“自分自身が平和そのものであるキリストの内で、キリストの体である教会の内で、キリストは全ての人々を平和な共同体へと造りかえるのだ”と、そのようにパウロは言うのです。

大江さんが言うように、キリストは十字架の上で死なれ、そして「新しい人」となられました。敵意を滅ぼし真の和解を造り出してくださった「新しい人」、平和の君、そのものです。それと同時に、「新しい人」とは、そのイエス・キリストを頭とし、キリストの体でもある『教会』のこと、教会はその「新しい人」でもあります。またその教会に連なる私たち、一つひとつの肢、それが「新しい人」であります。

「新しい人」キリストが敵意を滅ぼし、和解をもたらす、教会がそのことを強い確信を以って宣傳伝えたパウロの時代から2千年も経って、なお私たち人類はこのことを成し遂げてはいません。それどころかそれに逆行する危機が増幅しています。「古い人」の勢いが遥かに盛んであることを誰も否認しない、そういう現実が厳然としてあります。

にも拘らず、私たちは今朝、『エフェソの信徒への手紙』から聴いた福音のメッセージを深く心に刻まねばなりません。それはエフェソに於いて教会の一致を成り立たせる、「キリストは私たちの平和」という原則が、この世界の平和の根底を形作っているという真理です。正にキリストの十字架こそは、世界の一切の紛争に何らかの形で、否、むしろ根底的に係わりを持っている。

であるならば私たちはここで、キリストの平和からキリストの平和によって生きる姿勢を学ばなければなりません。17節にあるように

キリストはおいでになり、遠く離れているあなたがたにも、また、近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせられました。

そのようにパウロは言っています。このようなキリストを模範として私たちは平和を造り出す課題と使命とに召されているのです。

大江さんは読者である子供たちに語りかけます。

“敵意を滅ぼし、和解を達成する「新しい人」になって下さい。「新しい人」を目指してください。「新しい人」になるほかないのです。何故なら、この世界の「古い人」である大人たちは、人類すべてを死滅させるかもしれない核兵器に頼って、地球の平和を保てると思込んでいるのです。今持っている核兵器を何時でも使える物にして整理しておくことが至上命令となっているのです。だから敵意を滅ぼし和解をもたらすための「新しい人」になる自己教育をあなた方は何時も目指していただきたい。”

そのように大江さんは言います。

もともと、「新しい人」になるために何が求められているか？ そのことを大江さんは明確に語っていませんが、大江さんのこのエッセイ集全

体から、読み取れることの中から二つのことを挙げておきます。

第一は、“嘘をつかない力”を持つこと。つまり“人間としての誠実、信実に生きる誇りを持つ”ということでもあります。

第二は、“希望と忍耐を以って持続する”こと。

これはパレスチナとイスラエルの和解の道を粘り強く探り続けたパレスチナ人であるサイド、もう亡くなりましたけれど、サイトという人から大江さんが真摯な思いを以って受け取り、そして次の世代に残したいとした言葉です。“希望と忍耐を以って持続すること”、そして嘘をつかない力を持つこと。私たちは今朝聞いた「キリストはわたしたちの平和」、この御言葉を戴きつつ、『新しい人の方に』向かって、共に手を携えて歩ませられたいと、そのように願う者であります。

祈禱を献げます。

主よ、語りました言葉をあなたの聖霊の働きによって活ける命の御言葉にしてください。この時間の中で御言葉が私たち全てを慰め勇気づけ励ましてくださること、そしてそのことが私たちの間に、近くや遠くのありとあらゆる場所に興りますように切に祈ります。

主キリストの御名によって祈ります。アーメン。

讚美歌 469「善き力にわれかこまれ」

献金・感謝・主の祈り(萩原孝博)

ご在天の父なる神さま、聖名を賛美致します。今朝は笠原先生の口を通して、あなたの御言葉を学ぶことができまして感謝でございます。どうぞ「隔ての壁」を取り払っていただき、わだかまりを打ち払って戴きますように。十字架において一つとなることができますように、私たちをどうぞ、新しい人にしてください。

この美しい大地をあなたから与えられておりますので、平和に過ごすことができますようにお導きください。

あなたより豊かな物を与えられておりますが、その一部を御前に献身と感謝の徴としてお献げ致します。あなたが教えてくださいました『主の祈り』をもって、一巡りの歩みを歩ませてください。…アーメン。

派遣: 讚美歌 92「主よ、わたしたちの主よ」

祝福: 主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の清き親しき交わりが、とこしなえにあるように。アーメン。

報告: 会員消息; 10/24 大野八重子(93歳)さんご逝去。修養会案内。

後奏: 「ソナタ」(J.S. バッハ)